

初

戀

私が十三の歳であつた。恰度濃尾に大地震のあつた二三年後のことである。

私は或町の片田舎に母親と二人で淋しい生活をして居た。そこへ一日、東京から着いたと云つて、一人の男が訪ねて来た。脚絆を脱いで座敷へ上つて、「私は此處の家の御新造の弟だ」と云つた。母親の弟なら、私のためには叔父である。私が母方の身寄と云ふものを見たのも、これが初めてである。

母親が何んな心持で此叔父を迎へたのか、何にせよ、小さい時分のことだから私には分らない。只、其時母親が私に云つただけ覚えて居る。三人の同胞の中で、只一人の男の子の弟が、十六の歳に家出をしたまゝ、皆日行方が知れない。両親もたづね倦んで、到頭死んだものと諦めて、葬禮迄出した。後々の法事法要も懇に用つた。それが両親も此世を去り、妹も後を追うて二十年も経つた今日に成

つてから、ひよつこり出て来たのだと——私は其語が面白かつた。併し叔父の顔を見ると、何かさす／＼して、左の腕には狐の面の刺青さへあつた。何だかそれが怖らしい。

兎に角、無人ではあり、それに父方の親類と云つては祖母の里が一軒あつたが、久しく往來も絶えて居たので、叔父は其儘私の家に居つくことに成つた。別段仕事もないので、私の相手をして折鶴を教へたり、釣竿の修繕をしたりして、毎日ぶら／＼として居た。一二箇月左様して居る間に、如何云ひくるめたものか、母親の手許から若干の金子を引出して町へ出て商賣を始めた。尤も其商賣が普通の商賣ではない。

五六年前から、此町にも鐵道がついて、それと一緒に遊廓が出来た。監獄署の裏から涸川に沿うて下つた畑中に建てられたので、大門もあれば、本通りには柳の樹を植えて、夕ざれば張店と云ふことをする。凡て吉原の様子を寫したものださうな。一時は物珍らしさに全盛を極め

たが、大地震からこちらへばつたり火が燃えた様に寂れた。中には、景氣の立直る迄持たへることが出来ないで、店を閉める家もあつた。其中の一軒を叔父が引受けたのである。

こんな商賣を始める位だから、叔父と云ふのは行方の知れなかつた間何處で何をして来たのだらう。一切私には分らない。母親も何と思つてそれに同意したものでか、別に聞かうと思ひなければ聞いたこともない。只思ひの外に金子が入ると云ふので、母親が折々思案に暮れた容子を見かけたことがある。田地を抵當に入れて金子を借りる所なぞも、他所ながら見聞きした。

私は母親から變人だと思はれて居たらしい。又多少憎まれて居た。別段變人な譯はないが、他の子供と違つて朝夕机に凭れて本を読む。それだけで最う母親などの眼には變な子だと映つたらしい。本を読むと云つても、其頃私は活版本の岩見武勇傳と自雷也物語とを讀んで、それに味を占めたので、土蔵の隅からよれ／＼に成つた頼家阿闍梨怪鼠傳を捜出して、深夜それに讀み耽つた。因よりそれが曲亭馬琴の作だとも、挿畫が北齋だとも知る筈がない、讀んでさへ居れば何でも可いのである。

ある日、學校から歸ると、見慣れぬ女のお客さんがあつた。髪のかき癖、着物の着こなし迄、其風俗が此邊の在所には見かけない。と云つて町の女とも違ふ。併し子供にはそんな事分らう筈はない。只妙な女だと思つた。日當りの好い縁側で、母親と向ひ合つて、袂の長い着物の上に襟掛けをしながら、不器用な手附でふち豆の筋を取つて居る。それを取つては籠の中へ入れる。大様しながら、二人で何やら話をして居た。「只今」と云つて見たが返辭がない。

私は上り框に片足掛けたまゝ、少時立つて居たが、其儘顔を背けて奥の間へ這入つて行つた。机の上に本袋を抛り出して、静手と坐つて居る。やがて、

「亮き、歸らしやつたかえ」と母親の聲が聞えた。

私は黙つて返辭をしなかつた。

「亮はまゝ」と云つたのは、其女の聲らしい。

其後は能く分らなかつた。何やらぼそ／＼と云ふ話聲が聞えて居たが、忽ち二人とも聲を揃へて笑ひ出した。私は何だか自分が笑はれて居るやうな氣がして、此儘逃出した位に思つた。

で、遠て讀みかけの頼家阿闍梨を取出して、其上に眼を曝した。

それにしても、あの女は何處から來たのだらう。

今度叔父の持つた家にはいろ／＼の女が居ると聞いた。女はかりの家だとも聞いた。何うも其中の女らしい。初めて見た時から何うもそんな氣がして成らぬ。

私の眼は本の上に注がれても、文字一字心にとまるのではない。

「何を見てらつせるの」と不意に頭の上で其女の聲がした。

私は理由もなく氣後れがして、いよく本の上に顔を伏せて仕舞つた。

「精出して勉強しやすなもの。」

かう云つて、女はやをら机の端に坐つた。そして、自墮落に片肘出して頬杖を突いたまゝ、凝手と私の容子を見守つて居るらしい。私は出来るだけ女の方を見まいとした。女も如何したのか、何時迄経つても動きさうもない。

私は只何となく、三年も前から私を知つて居さうな此女の素振が氣に成つた。其中から初めて女の女らしい臭ひをおぼえたやうな氣もした。勿論子供だけに、それとは分らぬ。分らぬ

ながら心が戰いた。一つは女氣のない、紅も白粉も見つたことのない在所の家に育つたためであらう。

「亮きや／＼」と、背戸で母親の喚ぶ聲がした。

「あゝ」と、大きな聲で返辭をした。

「此處へ來て、無花果摘つてお呉れや、土産に持たせて歸すのぢやに。」

「あゝ、摘つて上げよ」と云つたまゝ、ばた／＼と駈出した。

「田毎も見に來やあせ」と、二たび母親の聲がした。田毎と云ふのは其女の名らしい。

三人は非戸端の無花果の樹の下に立つて、尻が紫色にはじけて、ほと／＼と液汁の滴れさうな物干竿の先ではたき落した。それが小さな手籠に一杯に成る頃には、私も其女と平氣で口を利く様になつた。

間もなく、女は迎ひに來た腕車に乗せられて戻つて行つた。立ちしなかに私を喚んで、

「貴方や、叔父さまの家へも遊びに入らつせ。御馳走しますぜえ」と、こんなお愛想らしいことも云つた。

後で此女が叔父の家の職女郎で病氣して休んで居たのを、保養がてら遊びに來たのだとも聞いた。田毎といふ源氏名は忘れても、一

緒に無花果を喰つた女のこと長く忘れなかつた。

此語はこれだけで済んだ。

其間に、秋も暮れて冬の初めに成つた。私の家は地震の時に倒れかゝつたのを、架支棒をかつたまゝ、それ儘に成つて居たが、今度いよいよ修繕を加へることにした。大工や日傭の入つて居る間は自宅では勉強も出来ぬし、それに一里足らずの道を毎日町の小学校に通つて居たから、學校へ近い便利もあると云ふので、私は少時叔父の家へ泊ることに成つた。最初に叔父がすゝめて、母親も承知したものでらしい。

ある日、私は木袋を肩に掛けたまゝ叔父に連れられて行つた。町つゞきの畑の中に、二階三階と一際高い屋根の折襲なつた一郭がある。何日ぞや川祭の夜に遠くから三階の灯を眺めて、あれが金津の遊廓だと教へられたこともあつた。彼處へ行くのだと思ふと、子供らしい物珍らしさの中にも、一種の不安が伴つた。尤も、そんな所へ行くのが可厭だとも汚らしいとも思ふのではない。私はおどろしなから叔父の後へにくつ着いて小走りに走つた。大門と云ふものを見た。白塗の遊廓はからつとして人通りもない。何の家も森として物音

一つ聞きぬ。只街の真中に咽笛の波井戸があつて、其側で洋犬が二足戯れ合つて居たが、二足とも何處かへ駈けて行つて仕舞つた。

叔父の家は直ぐ前にあつた。

「此處だよ」と云はれて振向くと、入口に淺黄の暖簾を垂れて、「神風樓」と白く染抜いたのが見えた。打水の跡もしつとりとして、園の上には盛鹽が三つ盛上げてあつた。

私は叔父に隨いて暖簾をくぐつた。段梯子の横から張店のうしろへ出ると、帳場の上に神棚が祭つてあつて、長火鉢に大きな鐵瓶の湯が沸つて居た。そこを抜けて、風呂場や料理場の前を通りながら、とん／＼と廊下を降りると、裏座敷へ出る。一人年増の女が横に成つて居た。

「おい／＼、起きないか。お前からしてぐたぐた寝てちや、外の者のしめしが附きやしねえと口小言を云ひながら、叔父は一閑張の机を提出して、「此奴は上等だ。ね、此處で遣つてる分には、誰も遣入つて来やしないから、幾許でも勉強が出来る。」

私は其机の前に坐つて見た。年増の女はむつくり起上つて、ぼり／＼二の腕を掻いて居たが、「これ姉はんの何かいも、好

う入りやあななも」と、たたく笑ひながら私の側へ寄つて来た。此女は叔父が此商賣を始めるについで、急に買つた細君ださうな。

其晩叔父は帳場に坐つて、ちびり／＼盃を舐めて居た。私も其側で夕飯を喰べたが、いち早く箸を下に置いた。そして所在なきに、帳場のうしろに貼つてある藝子の引札を一つ／＼読んで見た。雙つ一とあるのが、何のこゝやら分らなかつた。そこへ新規に出来た叔母さんが表から駈込んで来て、

「入らつせ／＼、松泉樓で店を附け出したに入らつせ。お山さん見せて上げますに入らつせ」と、氣た／＼ましく喚んだ。

私はうじ／＼として立たうともしなかつた。「お山は内にだつて居るさ」と叔父は苦笑ひして居たが、「何だ、店を附けるだなんて、下足私なんぞ鳴らすなア、ありや小店ですことつた。」

「早よ入りやアせんか。お可厭かいも」と、叔母さんは私の顔を見い／＼上つて来たが、赤く成つた鼻の先を長火鉢の上に出出して、「なも、お前はま、梅本ちや又新子が出るせえも」と、今度

「他所のことは如何でも可いやな。梅本だの、高が新地のおき屋ぢや無えか。神風樓と云やアお前、關東ぢや愛儀なもんだな。」

叔父は酔つて、何やら譯の分らぬことを云つて居た。後で聞いたが、何でも十三人居る彼どもの中で、五人迄病院へ入つて、今日の検査でも又一人取られたと云ふので、機嫌が悪かつたのださうな。

やがて二階からいろんな女がぞろ／＼と下りて来た。皆髪を被つたやうな髪かみの結方をして、白壁の様に白粉を塗つて居た。段梯子を降りきると、言合せて様に端折つて居た丹前の裾を下して、べちや／＼と饒舌りながら、一人づつ張店の方へ出て行く。

私はぼんやりとしてそれを見てゐた。何だか悪い着物を着た女の行儀の悪いのが、不思議なやうな胸の悪いやうな心持がして、直に裏座敷へ戻つて寝て仕舞つた。

明るく日は日曜であつた。私は話相手もなく退屈な一日を過した。帳場へ行つても仲居や豆どんが書經をして居るし、机に向つて見ても、如何云ふのか本を讀む氣にも成らぬ。戸外へ出て見る氣には尙更成れなかつた。

午後の一時頃、裏木戸を開けて一人の客を送り出した女があつた。その後姿が何日ぞや宅へ来たあの女らしい。二たび錠を叩いて此方を見ようとした所を見ると、矢張り左様であつた。庭下駄を穿いたまゝ、私の居る座敷の直ぐ前を通つたが、何か心の急ぐことでもあるのか、振回つて見ようとしたが、其儘とん／＼と裏椅子から上つて行く。私はそれを見送つたまゝ、何だか物足らぬ心持がした。

少時左様して居たが、不圖思ひ立つて、二階へ上つて見る氣に成つた。わざと梯子を避へて、帳場の前から上つて見た。表二階の十疊間にはしつぽく藁と大きな鬼面の火鉢が置いてあるきりで、何一つ見當らない。其隣の部屋では、四五人の女が寄つて、何やらべちや／＼饒舌つて居るらしい。私はそつと反れて裏の方へ廻つた。行燈部屋の前で豆どんが洋燈掃除をしてゐるのを見かけた。其側を避けて通つて、廊下の外れ迄行つて見た。女の部屋の前には、黒塗の札に各自の名が書いて下げてある。私は一つ一つそれを読んで行つた。一番奥の部屋で「田母」と云ふ字が見當つた。私は何がなしはつと思つた。

見ると、障子が一枚開け放したまゝである。

おづ／＼其間から覗いて見た。上置のついで簞笥の前に、一人の女が彼方向きに成つて耳の邊り迄捲卷を引被つたまゝ寝て居る。あの女だ、あの赤ちやけた髪かみの房々としたのが、あの女に違ひない。客を送り出して、其儘部屋へ歸つて寝たものらしい。部屋の中は森閑として、時たま長火鉢に掛けた鐵瓶の口から有るか無きかの湯氣の輪の上るのが見える。

私は物珍らしさうに凝手と女の寝態を見守つて居たが、つと眼を反して、うしろ向きに廊下の欄干に凭れた。此家の裏は黒板塀の下に一間幅の濶川が流れて、それに沿つて田舎道が通つて居る。其道の向うは一面に霜枯の田野がつゞく。黒い桑の葉が／＼して、薄い午後の日影は當つて居ても、何となく風が寒さうである。不圖見ると、正面のやゝ黄ばんだ森の外れに、ぽか／＼と煙が湧く。つゞいて藪と地面を撼がすやうな音が聞えた。

「あゝ、汽車が――」

私は思はず口走つた。そして此方の森から彼方の森迄、田圃に沿つてうね／＼と駛る汽車を見送つた。
「寔はま、何時入りやアた。」
背後で女の聲が聞えた。振回つて見ると、何

時の間にやら女は寢返りを打つて、此方に向いて枕をしたまゝ、眼を開いて居る。

「一遍此處へ入りやアせ」と、片手を疊の上迄伸ばしたが、「おいやかいも」と云つて、其儘又うつとりと半眼に成つて行く。

私は女の紅く彫れ上つた眼臉を見ながら、それきり物言つて呉れぬのが、何だか物足らぬやうな氣もした。

やがて女は又不意に眼を開いた。四邊をぎろぎろ見廻して居たが、急に腹這ひに成つて、長煙管の雁首で朱塗の煙草の箱を引寄せながら一つ大きな欠伸をした。

「寢はま、お前はまゑも、奴え人だに其處にある燐寸取つて頂戴はんか。」

「何れな」と云つて、私は部屋の中へ這入つたが、「あ、これか」と、長火鉢の猫板の上にあつた燐寸を取つて、女の手に渡した。

女は燐寸を擦つて、お腹の中迄煙草の煙を吸込んだ。それから又物臭さうな手附をして、二度目の煙草を詰めながら、ぶーと鼻の孔から太い煙の柱を吹出した。

私は不思議さうに其顔を見守つた。
二三服立てつゞけに吸つて、ぼんと煙草を抛り出したが、其儘左の頬を枕紙に押附けて、

「お前はまゑも、些とも叔父さまと似てりやはんなも——阿母さまとも、澤山似てぢやない。」

かう云つて、「一寸言葉を送切らしたが、「本當に好え生際だなも——女でも欲しいやうだがいも」と、じろく私の顔を眺めて居る。

私は生れてから未だ自分の顔について彼是云はれたことがない。くわつと逆上るやうな心持がしながら、矢張りじくとして其處に坐つて居た。

「あゝ、左様々々、好え物があるに待つてりやアせ」と、女は突然起上つて、何やら箆筒の位置の中を捜して居たが、

「寢はま、最一遍私に頼まれとくりアはんか」と、最う別な事を云つて居る。
「何ぢやな」と私は初めて口を利いた。

「えゝ」と向うを向いた儘返辭をしたが、やがて二三通の手紙と封筒とを持つて、私の側へ探り寄るやうにして、

「あのえも、男の手で此上書をして頂戴なも」と、狡猾さうな、相手を調戲ふやうな眼附をして、私の顔を覗き込んだ。
私は只黙つて點頭いた。此女から物を頼まれ

るのが嬉しいやうな心持をした。

「本當に書いとくりやアすの」と女は念を押して遺棚から硯箱を下して来た。そして片手で墨を磨りながら、筆の穂を前窗で嚙んで、私の手に渡した。

私は女の云ふが儘に宛名を書いた。
「裏には稻垣——左様、私がおくめだでも、彙雄として頂戴はんか。彙太郎でも彙吉でも可えわなも。」

こんな事を言ひく、私の書いて行く手許を見守つて居たが、「左様々々、それで好えわいも。此方の住所は書かんと置いて頂戴。」

かう云つて、封筒を手に執つて讀み下して見た。
「えゝ何うも有難う、ついでに最う一枚頼むぢなも。」

後の二枚も女の云ふ通りに書いて渡した。
女はそれを受取つて、直ぐに封をして出すと云ふでもなく、其儘硯箱の御斗へ仕舞ひ込んだ。

私はそれを見ると、何だか手持無沙汰で其處に居づらいうやうな心持がして、ばた／＼と段梯子を駆け下りて仕舞つた。
日暮前に、又三階へ上つて見た。西向の窓の障子の下に鏡臺を据ゑて、女は湯上りの寒さ

にも萎げず、兩肌を脱いで、顔に身粧ひをして居た。足音を聞いて一寸振返つたが、

「如何しやアした、あんなに逃げて行つて仕舞つて——」と云つたまゝ頸を伸ばして、襟脚の白粉を鬼の足でなどつて居る。

私は箆筒に凭れて、がちや／＼と引手を鳴らして居た。女も別に口を利くでもなく、眉毛に墨を入れたり、口紅を注したりして居たが、最後に最う一遍刷毛で鼻の頭をはたいて、

「さ、最うこれでお仕舞たぞい」と、兩肌を入れながら、此方に向いた。大きな黒眼がちの眼に露を含んで、雲間とは丸で別人の様にも見えた。

「何故逃げて行きやアした、折角上げましたのを取らずに」と、笑つて居る。

私はにや／＼としながら、何時迄もそこに立つて居た。やがて外の部屋から女どもが寄合つて来て、啞々云ひながら張店へ出る支度をする間も、片隅にしやがんで物珍らしさうに見て居た。

明くる日は學校へ行つた。併し女郎屋へ来て居ると云ふことは、誰にも云はなかつた。心では上りを待ちかねて、仲間から外れる様にして、とつそりと戻つて来た。そして直ぐに二階へ遊

びに行つた。

こんな風にして、暇さへあれば、私は此女の部屋に入浸つて居る様に成つた。時々例の上書を書かされた。何故私に書かせるのだと云ふことも、私には解つて居た。私は此女の云ふこと

なら、何でも喜んで居た。外の女から頼まれて書いて送ることもあつた。終ひには女と一緒に手習ひもした。

「宛はま、あゝ毎日毎毎さんの部屋へ行つて、何して貰やアす」と、仲居の片眼が私を捉へて云つた。

「何もして貰やせん。」

「あんな事云つてりやアすが、屹度何かして貰やしたに違ひない。」

私は調戲はれるのだと思つたから、黙つて居た。

「油氈りの田毎さんに訊つて貰やアすのぢやろ」と仲居はしち冗く繰り返した。

「何ぢや、油氈りつて何ぢやい。」

「はゝゝ」と笑つたまゝ、「叔母さまに訊いてりやアせ。それ、油氈りぢやで怖いぞな。」

置いたが、油氈りと云ふ異名は随分名高いものらしい。其後もちよい／＼耳にした。

ある日、叔母と仲居との話を傍聞きして、やつと其語が分つた。

此女はもと新地の清々樓に居た。矢張田毎といふ源氏名で出て居た。顔立は取立てて云ふ程でもないが、どこか氣が利いて、一寸三味線も弾ける。お客に依つては、新内のさはり位

好い聲で唄つて聞かせるので、座敷が持つて、一時は素張らしく賣つたものだ。それが爲に檢番から苦情も出た位だが、間もなく大垣

在のさる物持に引かされて行つた。ところで、そんな女のことだから、何うも田舎に焼つて

居る氣に成れない。如何かして其處の家を出ようと思ふのだが、深い世話に成つたおぼえもあるし、幾許そんな稼業をして来た女たと云つても、左様々々義理を外したことも出来にくい。

それぢやと云つて、其儘辛拷することは尙更出来ぬ。いろ／＼考へた擧句、不圖一策を想ひつ

いた。

それが油氈りの一條である。

びて、首を擡げた様に行燈の油を舐めたり、小甕の水を呑み出たりする。それで眼が覺めて見ると、當人は一向知らぬと云ふのである。まさか頸まで伸ばす譯には行かぬが、切めて油を舐める眞似でもしたら、向うから愛想を盡かして出て行けと云はれまいものでもなからうと云ふので、早速其支度に取りかゝつた。毎晩男の寢息を窺つてこつそり床を抜けて出る。それから行燈の向うへ廻つて、此方へ影が映るやうにしながら、びちや／＼と皿の油を舐めた。勿論出来ただけ男には氣附かれない様にした。男が身動きでもしたら、びつたりと止める。凝手と息を殺して、男が寝附くのを待つて、又そのそと出掛ける。随分氣の長い話ではあるが、そこが手際の入る所である。斯うして、毎晩根氣よく續けて居る間に、男も氣が附いた。そつと女の寢床へ手を遣つて見ると居ない。はてなと、四邊を見廻したが、枕元に置いてある有明の中へ首を突込んで、びちや／＼と油を舐めて居る。それが明くる晩も續く、其又明くる晩も續く。左様なると男も惱氣が附いて來た。幾許執心を掛けた女でも、左様云ふ女では家に置かれない。で、何氣なく女を喚んで、少し都合があつて暇を遣るから、お前に當てがつた物は

悉皆持つて行くが可いと言ひ渡した。女け思ふ處に放つて來たと云ふ心持を色にも見せず、それでは是非が御座いませんからと、體よく其場を下つて、身のまはりの物は小片布一つ残さず持出した。そして、又元の古集へ舞ひ戻つて、一箇月も經たぬ間に同じ家から勤めに出た。男の方でも、後で一杯喰はされたと氣が附いたらうが、大家の主人ではあるし、それ限りに成つて仕舞つたさうな。油舐りと云ふ異名はそこから出た。

其後、半年餘り新地に居たが、神風樓が出来ると一緒に移居して來たのだと云ふことである。こんな話を繰返して、

一それでも、よく／＼可厭ぢやつたと見えるわなも。あの女が、本當に室種油を舐つたんぢやるか」と、仲居は片眼を光らしながら云つた。

一そりや些とは喉へも行つたのさな。」

一は、／＼二人は笑ひながら立上つた。

私は少時其後に立つて居たが、急につか／＼と二階へ上つて、女の部屋へ行つて見た。女は今日も蒲團の上に寝轉んで居たが、足音を聞くと眼をばつちり開いて、お出／＼をするやうに、夜着の片袖を捲上げた。

あの口で油を舐めたのか、本當にそんな事を

したのかしら——

それが讀みたいと思つても、如何しても口へ出ぬ。私はだん／＼女の側へ近づいた。女の顔を見詰めたまゝ、じり／＼と側へ寄つて行つた。云ひたい、云ひたいと思ふことが如何しても云はれない。

一如何しやアした」と云ひながら、平常の様に兩手で私を引寄せた。私は女の頸の下へ頭を押し附けたまゝ、一人ぼろ／＼と泣いて居た。

其後、油舐りの一件は噂にも出さなかつた。師走の二十一日に、祖母の法事がつとまるといふので、私は一寸自宅へ戻つたが、冬休暇の間は其儘自宅に居ることにした。一箇月餘りもあんな賑やかな生活に慣れただけ、母親と二人、それに作男を加へても三人鼻を突合せて膳に向ふのが、噁となく淋しかった。殊に喰物が不味かつた。小さい時から喰ひ慣れた、お膳節にお醤油をかけて御飯に添へて喰べるのが何うも可厭で堪らない。

それでも、暮の二十八日には例年の節搦きをした。今年に叔父の家の分も一所に搦いて、町からも手僅ひに來ると云ふので、朝から大騒ぎをした。日暮から搦き始めて、夜通し杵の音がして居た。そして、明日の午近くやつと搦きを

はつた。四斗檜の上に飾るのだと云つて、檜の鏡の外へはみ出る程の鏡飾をこしらへた。大晦日の日、皆それを荷車に積んで曳いて行つた。

除夜、元日、何事もなく済んだ。

二日の朝、初めて神風樓へ行つて見た。大門口を這入ると、廊の中は門松で林の様に見えた。

何處の樓も切刻ぎ竹に根こぎにした松や梅の古木をあしらつて、盛砂に景氣を添へてある。毎も

問は森として人通りもない街の上に、派手な裾模様

の襦袢を引掛けた男と一緒に成つて、羽根を突いてきやツきやと騒いで居る。赤い顔をして

格子先をぶらぶら歩いて居る男も見える。私はあわてて叔父の家の軒下へ駈込んだ。

みると、家の中が森閑として居る。少時梯子段の下に立つて居たが、誰も出て来ない。何だか富の外れたやうな氣もした。

そこへぱたぱたと例の叔母さんが二階から降りて来たが、

「あ、亮はまかど云つたまま、此方へとも云はず、あたふたと奥へ這入つて行つた。

私は氣に取られて立つて居た。ついで、のそく〜と隻眼の仲居が降りて来たので、

「如何したんぢやい」と訊くと、

「え〜と梯子段を降りて仕舞つて、田毎さんが酒に酔つて、叔父さまと喧嘩したんぢやぞな。そりや一時えらかつたに。」

「何故そんな事したんぢやろ。」

「何故つて、そりや云ふに云はれん譯があるのさな、まア可えに、一遍二階に行つて見てりやアせ。」

「左様」と云つて、二階を見上げたが、女が酔つて居ると聞いたので、思ひ切つて直ぐに上つて見る氣にも成れない。

少時うじうじして居たが、一段づつ梯子を上つて、そつと引附を覗いて見た。そこに五六人の女が立つたり坐つたりして、何やらぼそ〜と話して居たが、一人が振向くと外の女も皆一

齊に振向つた。

私は直に奥の部屋へ行つて見た。女は懐手をして兩脚を投出したまゝ、箆笥の抽斗に凭れ

て居たが、上眼にじろりと私の顔を見たきり、直ぐに又眼を伏せて、何時迄待つても何とも云

はぬ。毎もとは容子が違ふので、私から何か云はうとしても口へ出ない。少時立つて見て居た

が、あきらめて階下へ降りて来た。

何でも、其晩から客へ出ないと言ひ張つて、

ふてて居たさうなが、それでも午過ぎに馴染の客が来たと云ふので、其男を相手に陽氣にはしやいで居た。三味線や太鼓の音も聞えた。そんな譯で、私は女の座敷へ行くことも出来ず、一人鶴工場の側の吹矢へ行つて、吹矢を吹いて暮した。そして、明くる朝早く自宅へ歸つて仕舞つた。

此後、私はたまに叔父の家へ行くことはあつても、長く逗留して學校へ通ふやうなことはなかつた。

女の部屋へも滅多に行かなかつた。私には能く解らないが、家の稼業も思はしくなく、だん〜店も寂れて行くらしい。叔父自身他所の樓へ上つて騒いで戻つて来て、それが悶

着の種子に成ることもあつた。

そんな風で二三箇月経つたが、陽氣がぼかぼかとして桃の花の吹く時節に成つても一向景氣が立直らない。其間叔父は内密で店を人に譲

つて其金子を持って、夜逃げ同様に名古屋へ上げ越して行つた。そこで小料理屋の様なもの

を始めたと云ふことだが、それからと云ふものは私は一度も叔父の顔を見たことはない。又、勿

論私の家へ顔を出したこともない。

一年許りして、叔父が酒毒のために死んだと云ふ噂が傳はつた。其時は最う小料理屋の店も

閉めて、何處かの裏長屋へでも這入つて居たものらしい。例の叔母さんは如何したらう。

「あれも感心な女ぢやぞえ。貞次が死ぬ迄側に
ついて居て面倒見たのぢやさうな。」

母親はこんな事を云つて居た。

二

私は十四の春を迎へた。

其頃から、私は俄然大人びて来た。身長もずる／＼と伸びて、一人前の小男よりはずつと高かつた。子供らしい遊びにはすつかり興味が失せて、同級の仲間などが夢にも知らないやうな、大人の世界に對して苦しい憧憬を感じて来た。そして、一人寂しい目を送つた。

勿論早熟だとは云はれよう。併し私には左様云ふ時期に際して男だてら邊幅を氣にしたり、女と云ふ女が氣にかゝると云ふやうな心持は知らなかつた。日常日に觸れるやうな女は、私とは縁もゆかりもない。私の心にとまる女は、只小説本や講談の中に棲んで居た。たとへば花見の歸りに若衆を見染めて、戀わづらひをしたり、それから乳母の仲立でやう／＼思ひが極つたり、悩つたかと思へば又別れたりして、悪漢に勾引かされるやら、苦界へ身を沈めるや

ら、さま／＼憂目を見た擧句、二たび男に返り合ふと云つたやうな女であつた。此一年間に、私は何れだけ小説や講談を讀んだか知れない。

尤も作者の名も知らず、表題さへ知らずに讀むのだから、後では一つとして覺えて居らぬ。只次から次へ讀みに讀んだ。高潮に達した所へ來ると、明けの鐘を聞いて床へ這入つたことも一度や二度ではない。夜も書も夢を見て居るやうな心持がつづいた。其中へ入り込む女には、只一人廓で知つた女があつた。

其後、あの女のことは忘れるともなく忘れて居た。それが何時となく、二たび心にかゝる様に成つた。あの當時の事を一つ／＼想ひ出して、二たび眼の前に泛べて見ることもあつた。あの女も、一日廓を出てしばらく桑名で藝者をして居たが、それも面白くなかつたのか、此頃又余津へ舞ひ戻つてつとめをして居ると云ふ噂もうす／＼聞いた。併し逢ひたいと思つても、わざ／＼逢ひに行つて見るだけの熱心はなかつた。

昔から稗史小説の作者は、遊女を卑しいもの、擯斥すべきものとしては教へない。寧ろ威嚴のあるもの、押の利くもの女と生れたらあやかりたい位のものにした。私も左様は思はないま

も、決して賤しむ氣はなかつた。それに、あのやうな事情からあのやうな種類の女を知つたので、普通の人の持つやうな、女郎を齒すべからざるものとするやうな心持は、悲しいかな、一度も持つたことがない。只現實に見る女郎には物の本で讀む浮川竹の女に見るやうな、水仙の根を切つて花瓶に挿したやうなしをれがない、萎れた寂しみが無い。そこに一種の反感を持たせるものがある。

兎に角、小説や稗史を讀みながらも、時々あの女の姿が紙の上にもちらつて、雪の降る夜、裏庭の松の樹に縛られて遣手に折檻されて居る遊君をあんな女だと思つたり、それを私が塀を乗り越えて助けに行つたりするにはしたが、未だ錢を握つて遊廓へ足を踏み入れるだけの皮胸はなかつた。そんなにして、其年無事に暮れた。

明けの年の春、私は鶯谷の小學校を卒業した。此儘田舎に残つて百姓に成らうか、それとも上京して學問をしようかと云ふことが問題に成つた。年貢米を貰つて、冬は獵銃を擔いで林の中をあさつたり、夏は竈眞器でも肩にした、水邊をぶらついて、一生のらくらして暮すのも氣樂で好いかも知れぬ。只、それでは何だ

か残惜しい。見ない所も見たい、知らない所も知りたい。殊に此儘田舎の州俊には成りたくない。四圍の男や女とは違つたものになりた。違つたものとして迎へられたい。私はいろいろ思ひ悩んだ擧句、卒業したら買ふ筈の獵銃と寫眞器とを捨てて、一人知らぬ旅路に上つた。

上京して、初めて志した學校へ行つて見た時、私はその狭いと汚いと憫れた。芝口に宿を取つたまゝ、一週間許り通つて見たが、先生も生徒も教へることも詰らない。全體東京の街からして思つた程に美しくもなければ、立派でもない。これぢや如何しても長く居つく氣がしない。いよゝ故郷へかへるつもりになつて、同宿の男に案内を頼んで、上野淺草と見物して廻る間に、其男は私の紙入を渡つて宿屋の二階に私を置き去りにした。仕方がないから、宿の主人に事情を打明けて、故郷へ書留郵便を出した。電報では意を盡さぬし、書留郵便なら普通の郵便よりも早く着くだらうと思つたからである。

二三日して故郷から一人の男が出て來た。其男に伴はれて私は初めて下宿屋と云ふものの軒をくぐつた。其處から、又元の學校へ通ぶ

ことに成つた。下宿屋の起臥程味氣ないものはない。私の夢は宵々に故山へ飛んだ。不思議なことに、私の夢に入るものは故郷の家を守る母親でもない。勿論遊び仲間の友達でもない。あの女だつた。廓に居る女であつた。

夏の休暇に成つた。遊學と歸省。此二つの言葉位當時の私に快くも懐かしく響いたものはない。而も遊學に失望した私は、何の位歸省を待ちかねたらう。明日の朝立つと云ふ前の夕、銀座で少々の買物をして、革靴に詰めて、枕頭に置いて眠りに就いた夜は、私の一生の間でも、實際幸福な夜であつたらしい。

が、いよゝ汽車が故郷の町に着いて、改札口を出た時、私は最上一種の物足らなさに襲はれた。歸省する位なら、停車場へは弟や妹が迎へに來て貰ひたい。妹の年は十三で、弟は九つ位で有つて欲しい。併し一人子の私には弟も妹もない。妹の連れで、最一人同い年の妹にも來て貰ひたい。其頃濫讀した小説に魅せられて、心潛かに許嫁の女を描いて居た私には、それが無いのも、何とやら物足らなかつた。私を迎へには、家の作男が荷車を引いて來て居たに過ぎない。毎日家にぶら／＼して居ると、一層物足り

ない。偶には十三になる作男の小倅で、釣の上手な奴にそのかされて、漁師の船を借りて、大川へ釣りに出て見たが、それも興味を持たぬものには一向面白くない。柳の下に船をもちやせて、小倅が糸を垂れて居る間、私は胴の間に寝轉んで、水陰の『女房殺し』や眉山の『大盃』に讀み耽つて、其儘歸つて來ることが多かつた。

長良の川祭の夜かと覺えて居る。未だ日の出る頃から出かけて行つて彼方此人込みの中を押されながら、宮の裏へ出た。賑やかな人いきれの中を抜けて來ただけ、急にひつそりとして、ちらほら通る人影も怪しうに見える。川の流れについて、だん／＼堤を下つて見た。だんだん祭の場から遠ざかつた。

渡船場を上つて、堤の上へ登つて來る一團がある。其後から一人の女がおくられて上つて來た。何うもそれが二年前に別れた例の叔母さんらしい。私は思はず足を止めて、「おいと喚んで見たが、其あとに叔母さんとは如何しても口へ出なかつた。叔母さんは一寸眼を上げたが、其儘私の前迄來て、

人懐こいやうな表情をした。

「え」と云つただけで、別に云ふ言葉を知らない。

「彼時から、阿母はまは御機嫌よろしいかなも。」

又、「え」と云つて、少時黙つて居たが、「僕

は、此春から東京へ行つて居るんだぜ。」

「東京へなも——矢張勉強にかいも。」

「あ、今は夏休みで歸つてらつせるだなも」と私の顔を見て居たが、

「一通金津へ遊びに来やアせんか。田毎さんも居りやアすぜえも。」

私は心持顔が靨く成るやうに思つた。

少時して、「何と云ふ家に居るの」と訊いて見た。

「田毎さんかな。」

「うむ、叔母さんでも、何方でも。」

「え、田毎さんはなも、金波樓知つてりやアすぢやろがな。角のあの家に居やアすに、一通逢ひに行つてりやアせ。」

かう云つて叔母さんにはや／＼笑つて居る。

随分大きまりの悪い思ひをしながら、それでも何處やら嬉しさうな心持を隠し切れなかつた。

其夜、家へ歸つてからも、同じ事ばかり思ひつづけて居た。夜が明けても、未だ同じやうな心持である。

午過ぎ、例の小倅を誘つて、大川へ釣に出て見た。だん／＼船を下へ流させた。下るにつれて、遊廓が近づいて来る。此邊から堤へ登れば、廓の裏までは四五町もあるまい。

「おい、一寸向うの岸へ船を着けて呉れんか。」

「何處ぞへ行くのかな。」

「うむ、町へ買物に行つて来る。」

小倅は云ふが儘に、船首を堤の下の砂地に着けた。

「此處に待つちよるのかな。」

「なに、歸つて来たら喚ぶで、何處へなと漕いで行つて居るが可い。」

かう云ひ棄てたまふ、堤の腹を駆け上つた。

堤の上になつて、一寸向うに見える屋の棟の高

い一部を見渡したが、其儘又駆け下りて、田圃の中につゞく小徑を一散に走つた。誰か見て居るやうな気がして、只もう走らずには居られなかつた。日光が頭の上から照り附けて、田の水も沸立つやうな日である。

裏門から廓の中へ入ると、傍目も振らず、金波樓の門口へ来た。流石に一度は通り越したが、

二度目に其前迄戻つて来て、つと軒下をくゞつた。土間に突立つたまふ、

「おい／＼」と喚んで見たが、皆書寝でもして居ると見えて、一向返辭をしない。

「おい／＼、誰も居らんのか。」

二たび泣出しさうな聲を出して喚んだ。

「へえお出やす」と直ぐその胸高障子の中から寢惚けたやうな、頓狂な聲が聞えた。やがて亂次ない風をした女が上り框へ出て来て、

「お出やす、何うも御無禮しました」と云ひながらじろ／＼私の姿を眺めて居る。

「上つても可いかい。」

「え、何卒」と遽つて云つたが、藁草履を穿いて、編笠を抱へた私の様子が、何うも腑に落ちぬらしい。私は構はず梯子段を上つた。後から

跟いて来た女中に向つて、

「田毎と云ふのが此家に居るんだね。」

「え、見えます、田毎さん喚びましたよかなも。」

「あ、」。一人引附に残されて、ぼつねんと待つて居ると、やがてばたん／＼と悠然した重草履の音がして、

「まア」と云つたまふ、女は闕の前に立止つた。

私は立上つてつかく／＼と側へ寄つた。

女は少時私と眼を見合せて居たが、

「部屋へ入らつせ」と云つたまゝ、くるりと背後を向けた。そして急ぎ足に廊下を引回して行く。

私は胸を躍らせながら其後に従つた。

いきなり障子を両方へ開け放して、

「暑いに、開けて置かうかい」と、べつたり長火鉢の前に坐つた。

私にも向ひ合つて坐らせながら、「本當に好う来てお呉れたな。如何して此處が分つたな。

え、叔母さんに聞きやしたのかな。」

私は只相手の顔を見ながら笑つて居た。

「あゝ、左様だ、それで解つた」と、頓狂な聲を出しながら、「此間の晩途中で叔母様に逢つたら、田毎さんの昔の好い人に逢つて来た」と云つて、如何しても名を云やアせんだが、それ

ぢや、屹度それが貴方のことに違ひない。」

私はくすぐつたいやうな気がしながら、それでも嬉しかつた。

「これ如何しような」と仲居が引附に忘れて来た編笠を持つて来た。

「あゝ、それか」と云つて、私は傍から引たくらうとした。

「何だいも、それは」と女は笑つて見て居る。

「釣に來たものだから。」

「好え物釣りに來やしたな。」

二人が聲を合せて笑つた。私は眞赤に成りながら、相手の女が憎いやうにも思つた。女は何と思つて居るのだらう、何と思つて私が此處へ來たと思つて居るのだらう。

「左様だかえ」と、女は笑ひ止んで、「此お人知りやアせんか。私が元居た家の息子さんだぜえも。」

「へえ、神風樓の。左様かい」と仲居はじろじろ私の顔を見て居る。

「左様ぢやないや」と私は避けて取消した。

「えゝ、息子さんと云ふ譯でもないけれど」と、女はいろんな當時の事を言出して、「毎日一緒に手習ひをしたでしよ。貴方も記憶えて居やアすか。」

併し、私はあの頃の私ぢやない、あの時分の私だと思つて貰ひたくない。左様思はれるのが可厭さに、仲居が、

「何ぞ取つて参りましたよか」と云つた時にも、直ぐに、

「私は酒が飲めるんだぜ」と云つた。

「お酒上りやすの。」

「あゝ、東京ぢや誰でも呑むんだよ。」

かう云つた時には、自分ながら嬉しかつた。仲居が出て行つた後で、

「さ、浴衣と着たへやアすな」と、筆筭から糊のごはくしたのを出して、背後から被せた。帯迄結んで貰つて、二たび座に着いたが、両方の肩から襟の邊りを振回つて、何だか影護たいやうな心持もした。子供扱ひにされるのは可厭でも、こんな所へ來る並の客の様に遇はれるのも好い心持ではない。

やがて三つ井に銚子をつけて持つて來た。

「御面倒さま」と女はそれを受取つたが、「私達二人で好え様にするに、ほかつて置いて休んどくりやア。」

「へえく／＼、そんなら御氣隨に」と、仲居は其儘引下つた。

私は盃を取上げて二つ三つ續けざまに乾した。女も黙つて其後から注いで居たが、急に銚子を引くやうにして、

「最う止めて置きやアせ。無理に飲むと、後で苦しいぜえも。」

「ぢや、上げよう」と、私は出した盃を相手に突き附けるやうにした。

「私最う澤山」と、大業に顔を蹙めたが、手に

持つた銚子を下に置いて酒を切り上げることにした。

私は思はずどきりとした。

「ね、それで可えでしよ」と襲ねて云はれて、

私は女の云ふ儘に成つた。やがて女は、

「一寸待つてりやすな」と、其儘下へ降りて行つた。何をしに行つたのだらう。何だか看護婦

が患者でも取扱ふ様に、物慣れた扱方をされるのが怕らしいやうでもあり、又物足らぬやうでもある。

少時して何やら鼻唄をうたひながら廊下を戻つて来た。そして、

「些との間、かうして置かうかい」と云ひながら、廊下の障子を両方からびたりと閉め切つた。

二人は部屋の中に閉籠つた。

「幾つに成りやしたいも」と、女が訊く。

「十五」と私は小さい聲で云つた。

「私より八つ下だな」と云つて、女は笑つた。

一時間許りの後、二人は又長火鉢の前に向ひ合つて坐つた。私はうつとりとして女の顔を眺めた。女の容子がまるで違つて見える。私の眼には最早元の女ぢやない。女も私のことを何

と思つて居るのだらう。それが聞いて見たい。それが知りたい。

とは云へ、女は別に何とも思つて居ないらしい。細帯のまゝ立膝をして、重たさうに鐵瓶の湯を湯さましへうつしたが、其儘朱羅子の煙管

を引寄せて、一服ゆつたりと吸ひ込んで、ぶうと鼻の孔から吹出した。私には出来ぬ義當である。私の吸へぬ煙草を吸つて、私の出来ぬことをする。それが忌々しい様でもある。

私は何時迄も歸りたくはなかつた。只、日が暮れてどきどき仕出してから廊下を出るのが可厭さに、思ひ切つて立ち上つた。女は裏木戸迄送り出したが、

「阿母はまに、私に逢つて来た」と云やアすかと、わざとらしく笑ひながら訊いた。

「そんな事は云はないさ。」

「左様、それなら好えわな。」

私は木戸を出ると、又一散に駈出した。街の角を曲らうとして、一寸振向いたが、女は未だ元の所に立つて居た。

大川まで一息に駈け戻つた。小作はさも待ちくたびれたやうに、堤の下へ船をつけて、ぼんやりして居た。

「些たア捕れたかい」と訊いたが、只氣の無さうに、

「え」と云つて棹を突張つた。

暗がりの水の上を半里餘り漕いで上つて、百姓家の夕飯過ぎに自宅へ戻つた。寢床へ入つてからも、ちやぶく／＼と船縁を洗ふさゞ波の音が耳について離れなかつた。

明くる朝、目が覺めると先づ廊下の女を思つた。昨日逢ひに行つて、又今日も行くと思ふことが、先の女に對して氣恥かしいやうにも思つたが、辛抱が出来ずに、例の小作をそのかして船に乗つて出た。

女は私の顔を見ると、只淋しきうな笑ひ方をした。私はそれが氣にかゝつた。何處やら前に知つて居た頃の其女とは違つて居るらしい。

が、何時迄そんな事の心にかゝる年頃でもない。その日も、何をしたらやら知らぬ間に日が暮れて、いや／＼送り出されて戻つた。

それからは毎日の様に廊下通ひをした。毎日同じ時刻に船に乗つて出て、同じ時刻に戻つて来た。晝間だから、何日行つても、樓中が森として、女も私一人を待つて居るやうに見える。

何時の間にやら、私は女を自分一人のものに様に思ひ出した。始終眼は輝いて居ても、丸で物の見えない年頃の私は、自分の火の手さへ高

まつたら、相手も一緒に燃えるものと思つて居たらしい。又、左様思ふのを、誰一人妨げるものもなかつた。

いよ／＼夏休みもをほりと成つた。

八月三十一日の朝、町の停車場から汽車に乗つたと見せかけて直に引回して、女の許に隠れて居た。此一週間、夢心地に酔つて居たことはない、一生あるまい。自分で何をして、何を云つたかも知覺えて居らぬ。女が何んな事を云つたかも知覺えて居らぬ。只、二人は起請と云ふものを取交した。小指の血を滴しながら、同じ文言を二通に書いて、一通づつ別けて持つた。尤も、これは女から言出したのだが、如何云ふ氣で、あの女がそんな事を言出したものか、今でも分らない。

一週間経つて、私は半分身體を残して行くやうな思ひをしながら、廓を立つた。

三

東京へ來ても無暗に手紙を出した。返事が來れば、直に又其返事を出した。側の思はくなどには未だ氣が附かない。當人は何と思つてそれを受取つたらう。兎に角、後れがちなが返事は來た。それが五通とたまり、十通と重つて、

終ひには東にして藏つて置いた。かうして一年の間づいた。

又夏休みが間近に成つた。恰度五月の節句の頃である。半月餘りたよりが絶えたと思つたら、不意に其女から一通の手紙を受取つた。裏書に名古屋市門前町何十番戸とあるので、先づ胸が轟いた。開けて見ると、去年の暮から二度出た老人の客に、不圖した話のはずみから急に引かされて、十日程前に此地へ來た、相手は造酒館の隠居である、年寄のことではあるし、ほんの出来心で引かせて貰つたのだから、長う續く筈はない、晩くて二三箇月もしたら暇が貰へるだらう、そしたら貴方の側へ行つて、縦令何んな苦勞をしようとも屹度添ひ遂げるから、必ず惡う思つて呉れるなど云ふ知らせである。

私は生れて最初のデイスイリユージョンに出逢つた。遊女と云ふ名には何處か濡ひがある、たよ／＼とした所がある。併し人の妻が何だ、妾には同情も絲瓜もない。遊女は畜生に劣つた境涯かも知らぬが、未だしも人の子が成る。妾には畜生が成る。あの女が隠居の妾に成らうとは思はなかつた。私は眼が眩んで、四邊が暗く成るやうに思つ

た。一日一夜興奮した擧句、直ぐに其家を出よと書いて出した。愚圖々々して出なけりや、何れも彼も捨て置いて、此方から出かけて行くと書き添へた。彼方からは、今にも如何かするから短氣を出さずに待つて居て呉れと云ふ、煮え切らない返辭だが、其頃は、大分心持も納まつて、直に出掛けて行く程でもなかつた。

其後は此方から出す手紙も間遠に成つた。何れも様子が宛名の所には居ないらしい。それなのに居所も知らせぬ。何處かへ消えて行つて仕舞ひさうな氣もして、心も心ならず日を送つた。其間に、やつと休暇が來た。

夏の朝、旅装もそこ／＼にして新橋を立つた。かねて打合せもしてあるから、笹島の停車場へ着くと、うろ／＼場内を見渡したが、如何したのか女の姿が見えぬ。くわつとして、矢庭に腕車を備つて駆け出さうとした時、

「もし」と、背後から聲を掛けたものがある。一まア遡つて何處へ行きやアすか。」
「何處へ行くものか」と思つたが、好く／＼見ると女の容子が何處か窺れて、服装も思つた程好くない。何だか當が外れたやうな心持がして、思つたことも口へ出なく成つた。其儘腕車をかへして、女に伴れられながら、とある裏小路の

旅人宿に泊つた。

私は初めて此女が素人の風をしてゐるのを見た。併し最早私のものぢやない。左様思ふと堪らなかつた。如何して可いか解らない。他人に身受をされるものなら、何故其前に一言知らせて呉れぬか。其前に知つて居たら、私だつて如何にか成らぬことはない。母親の前に出て、斯うした譯だと有様を白状したら、それ位の身代金は出して呉れぬこともなからう。私は母親を見くびつて居たから、本當にそんな事が出来る様に思つた。従令出さぬ迄も出させて見せる。

命にかけても出させて見せる。そんな事情は女の方でも分つて居る筈ではないか。女にしては、隠居の姿に成るよりは、私の家へ来る方が仕合せであつたらう——

私は思ふさま言ひまくつた。

「そんな事云やアしても」と、女は口を挿んだ。「阿母はまに、私お目にかゝることの出来ん譯があるでなも。」

「何故々々、如何してそんな事を云ふんだい」と詰め寄せた。

「如何してと云つて、そりや、いろ／＼譯が有るわいも。」

「解らない、私には解らない。二人が夫婦に成

るものなら、お前が阿母さんに逢はぬ譯には行かんぢやないか。それとも私の許へ来て呉れると云つたのが謙かい、お前は私に謙を云つたのかい。」

「いゝえ」と頭振を擡つたまゝ、何とも言はぬ。私も少時黙つて居たが、「ぢや、最う云はない。濟んだ事は云はないから来てお呉れ。私の許へ来て呉れるのが可厭なら、私から行く。何處へでも隨いて行くよ。」

「貴方えも、今年十六に成りやアたなア」と不意につかぬ事を女が訊いた。

「何故歳見たいなものを訊くんのだい。」

「でも——貴方が三十に成りやアすと、私は幾歳に成るんぢや。かうつと、今年辰の二十九ぢやで」と、眼を瞷つて指折り數へながら、「恰度四十三だぜえも、そんなお婆さんでも好えかい」と、うそ／＼笑つて居る。

四十三にはさのみ驚かなかつた。私も何時かは四十三に成るのだ。併し女は確か私より八つ上だと覺えて居る。女の口からも左様聞いたやうな覺えがある。

「如何しやアた。何を考へてらつせるの」と二たび女が訊ねた。

「何も考へてやせん。歳なんぞ幾つだつて可い

んだ。歳のことなぞ考へやせん。私は只お前と別れたくない。お前が来て呉れなけりや、本當に私は如何なるか分らない。」

「そんなに云やアすと」と云ひかけて女は言葉途切らしたが、「だが今は左様思つて居りやアしても、三十に成つてから考へて見やアせ、屹度思ひ當りやせえも。」

「そんな、そんな人間だと思つて居るんかい。私はそんなんぢやない、そんな薄情な人間ぢやない。」

「えゝ、そりや分つて居ますとて。」

「分つてるなら、何もそんな——」

「まアそんな話は止めて置かうかい。折角私も無理をして来たんだに、しつぱりと逢つてお呉れやさんか」と、つく／＼相手の顔を覗き込むやうにして、「こんな事をしてりや、まるで帯屋の遊見たいだなも。」

「何だい、そりや。」

「何でも好いわなも。」

私は又女のするが儘に成つた。二人は徹宵ぼそ／＼と絶間なく話して居たが、明方に成つてうと／＼とした。敷蒲團は寝汗でしつ／＼として眼を覺ました時にも、半ば夢心地が離れない。

やがて、十時頃に朝飯を済ましたが、私は如何しても此處を立つ氣がしない。何時迄も此處に居たい、女も此處に止めて置きたい。

「私一遍、自宅へかへつて来ますぜえ」と、云ひ出した。

「いやだ、未だ歸つちや可厭だ——」

「そんな事云やアしても。」

「ね、今日一日だけは可いだらう。切めて日暮迄も」と、私は哀願するやうに云つた。

「それが、昨日も出られぬのを無理に出て来たのだでなも、如何しても今日は歸つて居らんと——え、何と云やしても。」

女はきつぱり云つた。

「だつて」と相手の顔を見詰めたまゝ、「其人は十日に一度か、半月に一度しかお前の許へ遣つて来ない」と云ふんぢやないか。そんなら何もそんなに遽で歸らなきや成らぬ筈はない。」

「え」と云つて、私の顔を見返したまゝ、少時何とも云はぬ。

「ぢや」と云ひ掛けたが、頭の中はびくりと動いた。「左様ぢやないと云ふんだね。」

女は黙つて點頭した。

「造酒舗の隠居だと云ふことも。」
二たび女は黙つて點頭した。

「ぢや、何だい。其人は何だい。」

「本當は——本當は博奕打ちやす人でも、其方の親分だと云ふことだがええ」と、「一寸私の顔を見ながら、又早口に言葉をついで、「それだ

でも、こんな事が知れようもんなら、何んな目に遭ふか——ひよつとしたら殺されて仕舞ふかも知れんぜえも。萬一そんな事にでも成つて、私だけなら可えが、貴方も迄——」

私は飽氣に取られて、何とも云ふことが出来なかつた。如何思つて可いかも分らない。

「だで、如何しても今日は歸らな——好えかいも、其間又都合を見て逢へるやうにするでなも。貴方も一度自宅へお歸りやアせな、悪いぜえも。」

さう云ひく、片側纏子の帯を締め直しながら、「私もそんな顔を見て歸つて行く」と、何日迄も氣がかりだでなも。好えかいも、屹度來月の五日過ぎには、私が實家へ行く」と云つて内を出るでなも、其時に貴方も四日市迄來てお呉りやアせ。え、左様して頂戴なも。」

少時返辭を待つて居たが、

「そんなら、最う行くぜえも」と、女は一足づつ部屋を出て行つた。

私は少時顔も上げなかつた。

あの女が遊び人と一所に成つた——あの女が、元々自分が好きで成つたのか、それとも——それが聞きたい、それが聞きたかつた。好きで成つたんだとすりや、そんな女に用はない。私とは縁がない。何うもあの女にはそんな所がある、私には分らぬやうな暗い半面がある。

其夕、汽車で自宅へ戻つた。二三日は人にも命はず、氣抜けがした様にして、うつら／＼日を送つた。そして、毎日同じ事ばかり繰り返して考へた。

或朝郵便脚夫の手から一封の手紙を受取つた。差出人の名がない。私は一通りそれを讀むと、俄に其日の午後口實を設けて家を出た。

四日市の町を外れて、山の手へ一里半許り上つて行くと、名もない温泉宿が一軒ある。そこに行つて待合せよと、手紙にあるを手頼りにして出た。知らぬ所へ行くのと、女に逢ふと云ふ期待とで心を震はせながら、汽車や腕車に揺られて、夕ぐれ目指す宿へ着いた。店に駄菓子や並べて草鞋や馬の沓さへ吊してあるが、奥は思ひの外に廣い。古めかしい勾欄が築山や泉水の端をめぐつて、内湯も湧く。女はと訊いて見たが、未だ着かぬと云ふ。其夜は裏の松山に騒ぐ風の音を聞きながら、一人黙りについ

た。

「明くる日、午前申待つて見たが、未だ来ない。午後はこの村に盆の村芝居があると云ふので、私は奇々ししながらそれでも気を紛らしに行つて見た。例の畑の中に蓆を引張つた小屋である。宿の女中に案内をさせて棧敷についたが、幕間の騒々しいこと夥しい。物質がわめく、子供が泣く、棧敷がひしめく。寝不足の頭にはぐわんぐわん響くやうな騒動である。私は幕開きも待たず這々の體で逃げ出した。」

「かへりには宿の前を通り過ぎて、一町許り行つてから氣が附いて引返した。廊下で行き逢つた女中が、

「あの四日市からお待ちかねの方が」と告げた。私ははつと思ひながら襖を開けた。

「お歸りやす」と、女は身體を振向けながら、「何うもおそく成りまして——大變待つて頂戴したさうだなも。」

「うむ」と云つたまゝ座についた。

私は女の顔を見ると、二たび逢へないものに逢つたやうな氣がして、云ひたいことも、口へ出ない。一緒に酒を飲んだり湯に入つたりして、ぐづぐづと日が暮れた。

それでも女が私の前で平氣で其男のことを

云ひ出して、柄癖が強いから一度も外へ出して呉れない、今度初めて十日許り留守に成つたので、早速實家へ行く」と云ひ置いて出て来たのだなど、事もなげに話すのを聞いては尙更堪らない。私は奇々する心を抑へながら、

「そんな男が、お前は好きなのかい、好きでそんな男の許へ行つたのかい」と詰るやうに訊いた。

女は意外な面持で見返したが、

「いゝえ、好きぢやない。誰もあんな怖ろしい人の好きなのがあるりますものか。」

「ぢや、何故そんなに左様成つたんだい。好きでないものが、何故初めに左様成つたんだい。」

女は唇を噤んだまゝ黙つて居た。少時して、

「それが因果だわいも、私の因果で——今更仕様がなないわいも」と、しめやかに言つた。

其顔を覗き込む様にしながら、「ぢや、矢張り好きだと云ふんだね。」

「いゝえ、嫌ひでも仕様がなない。彼様云ふ男に見込まれたが最後、幾許可厭だと思つても逃れ様がない。未だ貴方には解らんがえも、あゝ云ふ人達と云ふものは、一旦見込んだら、縦令殺してでも自分の思ひ通りにせな置かんのだぜえ

も。又殺さうと思つたら殺し損ひはない。それが可厭なら、あの人達の云ふが儘に成つて、思ひ通りにされて居るより外に仕様がなない。」

そんな事があるだらうか、そんな無法な事が此世の中にあるだらうか。私は相手の顔から眼を離すことが出来なかつた。

「それぢや、お前は其男の云ふが儘に成つて居るんだね。此後も成る積りなんだね。」

女は黙つて居る。

「如何しても」と、私は泣聲に成つて相手の身體を揺振つた。「如何しても私を捨てて行くのかい。これ、最一遍私の許へ来て呉れることは出来るんのかい、如何しても出来んのかい。」

「堪忍して頂戴と、女も泣聲で云つたまゝ、疊に顔を伏せて仕舞つた。

「いや、堪忍しない、私は何處までも堪忍しない」と、頑はないことを言ひ張つて、

「それよりも、私の云ふことを諾いてお呉れ、私の云ふ通りに成つてお呉れ。」

「そんな事云つてりやアして」と、女は又むつくり顔を上げて、「私が急に居らん様に成つたら如何しやアすか。不意に姿を隠したら——」

「そんな事をする積りか」と、私は吃驚しながら、おづ／＼相手を見守つた。

女の云ふ所に依れば、其男は北海道の空知太へ移住する計畫を立てて、今度もそれが爲に旅行したので、旅先から歸れば、直に此土地を引拂ふ手筈に成つて居る。勿論女も伴れて行く。今も云つたやうに、此際男の言葉に違ふなどは思ひも寄らぬ。何處迄も云ふが儘に成つて連れて行かれる所へ隨いて行く外はないといふのである。

空知太と聞いて、私は此女が死んで行くやうに思つた。最う争つて見る勇氣もない。只一生懸命に女の身體を放すまいとした。

「本當にそんな所へ行く氣かい、行くつもりに成つて居るのかい。」

「最う何も言はずに氣い好くして頂戴」と、女は涙に噎れた聲をして、「これから未だ七八日あるで、其間好きな事して遊ばうかいも。何でも相手に成りませえも。」

私はそれを嫌だとも云ふ勢もなかつた。明くる朝に成つて、伊勢詣りでもしようかと云はれたが、何うもそんな氣はない。何日迄も此處に居りたいと云つた。そして、毎日遺漸なげに女の顔を見てばかり暮した。

七日目に其處を立つて笹島の停車場へ戻つたが、前に泊つた旅行屋に立寄つて、女は其儘別

れて行かうとした。私は如何しても最一度逢ひたいと言ひ張つて、女も承知した。他人目を憚つて、女の後から見隠れに隨いて行つて舞津の隠れ家も突きとめた。とある二階の隣の露路の木戸を明けて一寸振回つたまゝ、女はつと姿を隠した。其夜、暗がりに紛れて、二三度其家の前を通つて見たが、空家の様に森とめて物音一つ聞えない。夜露にしつとりと袂も濡れた頃、やつと諦めて宿へかへつた。

次の日、かねて示し合せた時刻に例の露路口に行つて、ほとくと木戸を叩いた。やがて誰やら足音を忍んで近づいたかと思ふと、細目に木戸を開けて、女がそつと顔を出した。そして何にも云はずに手招きする。

私は黙つて木戸の中へ這入つた。何本も青桐の立つて居る中に古びた茶席めいた平家があつて、女はそこへ連れて行つた。其内側は案内こぢんまりと人の住む様にしつらへて、長火鉢には鐵瓶の湯も沸つて居た。

「昨宵は淋しかつたよ、私には逆も堪へられさうもない。」

私は座に着くと、直ぐにかう云つた。女は手を上げて制するやうにしたが、

「能く来て頂戴したなも、怖ろしいことなかつたかいも。」

「怖かつたよ。」

「誰も見えなくても可えわいも。」

「つと立上つて、側へ摺寄りながら、私を帶の上から抱き寄せるやうにした。私は戸口を見詰めたまゝ、がた／＼崩震ひした。

日暮前に、女は木戸口から私を送り出さうとした。私は女の袂を握つたまゝ、離さなかつた。仕方がないので、途中迄送つて来た。私は田圃道をぐる／＼廻りながら、何時迄も別れようとはしない。とつぷりと目も暮れた。

「何處迄行つても同じ事だで、最う歸るぜえも」と、女は幾度か繰返した。

私は其都度何とも云はずに女の袂を掴んだ。日が暮れて、人顔が見えなく成つてからは握りづめにして離さなかつた。

「一通そこ離して頂戴。最う歸つて居らんと悪いでなも。」

「いやだ／＼、如何しても離さない。」

「そんな無理な事云やアしても」と、女は立止つて引振斷るやうにした。

「何方が無理だ。如何してもお前は私を捨てる氣かい、捨てて行くつもりかい。」

私は窓の中に入つて坐つたまま、ぼろ／＼と涙を流した。流れる後から、涙は夜風に乾いた。其後から又新しい涙が流れた。

女も側に踞んで背中を撫でて居た。

「私はいやだ、お前に捨てられるのは可厭だ」と、時々想ひ出したやうに云つた。

如の畔を人が通るたびに、二人は聲を呑んだ。時間は何れ程経つたか分らない。

「最う行くが可えかい」と、女の聲が聞えた。

私は黙つて居た。

何時の間やら女は其處に居なかつた。

それから十三年に成る。

私は二たび其女を見ない。此後も恐らく逢ふことはなからう。

偶には何處に居るやらと思はぬこともない。

當時、本當に北海道へ行つたものと諦めたが、今に成つて見りや、あの女の云つたことは皆諛で、つい近所に生きて居る様に思ふこともある。

青桐の中の家は、其後行つて見ぬから分らない。

好きな文章 (抄)

そのうちドストイエフスキイなどの心理的な描寫が氣に入り出した。こゝでも矢張り刺戟の強いのが氣に入つた様である。例へば『罪と罰』の主人公ラスコルニコフが、余貨しのお婆さんを殺しに行つて、戸口の鍵の穴から部屋の中を覗き込むところの描寫に、心臓の鼓動が強くなつて、しまひには心臓以外の肉體は消えてなくなつてしまつたやうに感ずるといふやうな句がある。それなぞもその刹那のラスコルニコフの氣持を寫すには實に巧い文章ではあるが同時に刺戟の強いのが私には氣に入つたのである。それから同じ主人公が金貸し婆を殺した後になつて、その家の前を通ると急にまた自分の犯罪の跡が見舞ひ度くなつた。で、三階か四階かに昇つて行くと、ラスコルニコフの心では、殺された余貨し婆がまだ血塗れになつた儘倒れてゐるやうな氣がしてゐたのに、大工が入つて柱を削つたり、壁を張替へたりしてすつかり元の形がなくなつてゐるのを見て呆氣にとられたやうな顔をしたながら、「あの血はどうしたんだ」といふやうなことを聞くところがある。あれなぞも非常な

際の際張した心理を最も適確に描いたものである。どうしてこんなに刺戟の強い文章が好きなんぞでせう。恐らくは私の神經が麻痺して鈍になつてゐるからとも言へよう。恐らくはまた私の神經が麻痺しなければ止まない程に鋭敏であるからとも云へよう。どつちでも説明はつく。一方に決めて貰ひ度くない。がその後私もドストイエフスキイのやうな微に入り細に亙つて、情調を顧みないやうな文章は本當ではないやうな氣がして來た。矢張り小説の文體としてはトルストイあたりが最も本流を代表するやうな中心の文章ではないかといふやうな氣がしてゐる。トルストイに刺戟の強い、官能的な文章は決して少くないが、ダンヌンチオのやうにこれでもか／＼と、後から／＼盛りつけられるやうな腹れはない。サイコロジを描くと云つても、ドストイエフスキイのやうに、他の事は放棄らかして置いて十頁も二十頁も同じ人の變則な心理を説明すると云つたやうなところは少ない。心理描寫と官能描寫が相俟ち相助けて、小説の文體としては上乘の模範をなしてゐるやうな氣がする。